柴田元幸と開かれた日本語

京都大学人間・環境学研究科／ **The Baker Street Bakery**

大久保友博／大久保ゆう

◇クリエイティブコモンズ

表示 - 非営利 - 改変禁止 2.1 日本

あなたは以下の条件に従う場合に限り、自由に
　*本作品を複製、頒布、展示、実演することができます。
あなたの従うべき条件は以下の通りです。
　*あなたは原著作者のクレジットを表示しなければなりません。
　*あなたはこの作品を営利目的で利用してはなりません。
　*あなたはこの作品を改変、変形または加工してはなりません。
（**http://creativecommons. org/licenses/by-nc-nd/**2. 1/**jp**/）

執筆：２００６年１月
　（学位論文「翻訳研究序論――空白の強度と翻訳者の現象学」より抜粋）
PDF ファイル制作：２００９年２月２４日
発行：２００９年２月２４日

ホームページ：**http://www. alz. jp**/221**b**/

アメリカ文学の紹介・翻訳から絵本の翻訳、映画字幕まで手広く手がける青山南のエッセイの中に、興味深いエピソードがある。詩人ロルカをスペイン語から訳した長谷川四郎についての話なのだが、彼の「スペイン語が分ったら、ロルカなんて訳せんヨ。アッハッハッハ」（青山 1987: 130）という発言を聞いて、青山はちょっと考え込んでしまう。それもそのはずで、英語なり何語なり、起点言語の能力があってはじめて翻訳ができるというのがふつうの考えである。しかし長谷川の逆説によれば、外国語ができないことで翻訳ができるということになってしまう。しかも、あっけらかんに言ってしまうのだから、たまらない。びっくりする。

> 長谷川四郎はどれくらいできないんだろう、どのくらいできないと翻訳ができるのだろう、と考えたが、答えはでるわけもなかった。当時、やはり人伝えに聞いた話だったが、ぼくのお気に入りのある翻訳家の口癖も「英語ができたら翻訳なんかできません」というもので、「どのくらいできないとできるのか？」という謎めいた疑問はわりと真剣に考えた。もしかしたらおれは英語ができて、だから、翻訳ができないんじゃないか、とも一回だけ考えたことがあるが、あくまでも一回だけである。その程度の分別はある。（青山 1987: 132-133）

青山は冗談めいた書きぶりをしているが、この〈起点言語ができない〉と〈翻訳ができる〉というのは、ある側面から見るとやはり真実と考えられよう。といっても、本当に起点言語を読むことすらできなければ、翻訳のきっかけとなる手がかりすらつかめない。ここで重要なのは、翻訳者本人が〈起点言語を自由自在に使えない〉という〈意識〉を持っていること、そう強く思っていることである。自分が普段使っているはずの目標言語の能力に比べて、はるかにわからないものとして起点言語が位置している、そういう認識が、大事な点となる。

何度も繰り返すようだが、生まれつきのバイリンガルの場合、どちらの言語

も自分にとって基本的要素であるため、なかなか意識的に言語を切り離すことができない。つまり自分の中でそれぞれの言語を異化することができない。そのとき、うまく翻訳が行えないことがある。自分の中でどちらも自分の血や肉と同じように〈使える〉と感じている場合、かなり意識的に切り離さないと、翻訳を行う際の措定で、起点言語・目標言語ともにうまく線が引けず、また間の空白も弱いものとなってしまう。それでは、いったいどこからどこへ翻訳していいのか、頭の中で理解できなくなってしまい、訳文の行きつく先がとても不安定なものとなる。(もしくは、それぞれが異化されすぎてしまって、自分の位置がなくなってしまう場合も考えられよう。そのとき、およそ身体性は低くしか現れないだろう。)

一方、〈起点言語ができない〉と意識していることは、起点言語が強く異化されているということである。それは、起点言語と目標言語の措定の間に現れる空白への意識がとても強いということでもある。さらに短く言い換えると、翻訳空間が硬いということだ。たとえ本当に起点言語を扱う能力がなかったとしても、それを本人が〈できない〉ということを自覚しているのか、無自覚なのかということは、翻訳の〈できる〉〈できない〉に大きく関わってくるだろう。もちろん〈できない〉ことに無自覚であれば、起点テクストに対する熱心な読み込みもないだろうし、それでは目標テクストを作るだけのエネルギーが得られない。しかし〈できない〉ことに意識的であれば、そのぶん翻訳空間が強くなり、翻訳の際、大きなエネルギーを必要とされる。そしてさらに目標言語への措定も強いのであれば、なんとかして目標テクストをその措定の枠内に入れようとする。およそ起点言語への〈できない〉という意識は、目標言語能力の裏返しであることが多く、自分の自分たる基盤の〈目標言語〉に比べて、起点言語ができない。そういうことであれば、その異化された〈言語〉を何とか自分の〈言語〉から表出しようとする。

翻訳が〈上手〉であるという発言の〈上手〉が、翻訳者本人の口からちゃんと語られているという事象のこととするなら、翻訳者の〈起点言語ができない〉という言葉は、翻訳の前提となる翻訳空間が強くとらえられているということにはならないだろうか。それは翻訳者が実際、起点言語を巧みに操ることがで

きたとしても、それを〈できる〉と思っているか〈できない〉と思っているか、それが異化されているのかされていないのか、翻訳空間が強いのか弱いのかで、できる翻訳はかなり変わってくる。翻訳空間が強く、それぞれの言語および表現体の措定がしっかりしていればしているほど、それに見合ったエネルギーと技術さえあれば、翻訳者のねらう場所へ訳出することが可能となるのである。

そして、もしそのねらう場所、訳出したい目標テクストの表現体が、目標言語において一般的でなかったり、そもそもなかったりすれば、翻訳者は〈翻訳〉という行為を根拠として、つまり起点テクストの存在という力を借りて、そこに新しい表現体を作るだろう。それは翻訳者自身の改革となるかもしれないし、目標言語内における一般的な措定の拡張となるかもしれない。あるいは、一度は忘れられてしまった場所に、ふたたび日を当てることもできるかもしれない。

このような観点から、この項では現代アメリカ文学の翻訳が多く、ポスト村上春樹世代の文学者に大きな影響を与えた翻訳者、柴田元幸を取り上げてみたい[4]。なぜなら、柴田元幸は〈翻訳空間の強さ〉と翻訳ということを考えた場合、格好の材料を与えてくれる優れた翻訳者だからである。

たとえば、柴田元幸もまた、長谷川四郎と同じように〈起点言語〉に対しての能力がない、というような発言をしている。

> 単純にもっと現実的なレベルで、僕の語学力はチャチなのである。英語の映画を字幕なしで見たらわからないところがいっぱいあるし、ラップの歌詞なんて本当にギリシャ語のごとくチンプンカンプンだ。読む方なら何とかなるかというと、これがまた、トロい。日本語を読む早さを１とすれば、英語を読む早さはせいぜい０．３である。内容吸収率にしても、日本語を１とすれば、英語は０．１２ということになる。要するに、僕にとって、英語とは相変わらず、文字通りの「外国語」なのである。（柴田元 1997**a:** 144**:** 傍点原文）

しかし、ここで単に本人が〈できない〉と言っているからといって、本当に英語がまったくわからないということではない。もちろん柴田は英語が読める

し、英語もしゃべることができる。英語の初学者から見れば、その言語運用能力は天と地ほどの差はあるだろうし、そもそも日本語がうまいとすれば、その〈０．３〉といっても、人と比べたらかなり高い数値になるはずである。実際、海外の作家には英語でインタヴューもできれば、イギリス人の同僚には、なぜ英語で教育を行わないのかといぶかしげに思われるほどの力量がある（斎藤 2005)。しかしここで重要なのは、およそ英語が達者にもかかわらず、柴田が常に〈英語ができない〉と発言する点である。これを単なる日本人的な謙遜ととらえてはいけない。ここにこそ柴田の翻訳の秘密があるといってもいい。その強くあくまでも異化されつづける〈外国語〉という措定は、柴田の翻訳空間の強さを物語っている。

しかし空白が強いだけでは、ただ単に訳すのが大変だ、という状況に追い込まれるだけにすぎない。ただ膨大なエネルギーが求められるだけである。もしそこから思うように訳したいなら、どこか目標テクストの目標地点を定めなければ話にならない。それはつまり目標テクストの言語措定や表現体を意識するということだが、柴田は文体への意識を様々なところで語る一方、次のような発言もしている。

> たぶん無意識のうちに僕は、まだ翻訳に頼るしかなかったころの自分のために訳しているのだと思う。(柴田元 1999**a:** 183)

この自分は、読者に強い身体化を要求するような翻訳を大学生のころなどに読んで、わからなくて泣きを見た自分のことだと柴田は言う。それゆえに、翻訳をする際に柴田は無意識的にか、目標テクストが〈照射されてはならない場所〉、〈書き出されてはならない場所〉というものが頭の中にはあるだろう。

目標言語側の措定に対する意識も高ければ、空白の意識も強い。では柴田が通り一遍の〈日本語〉しか書けないのかというと、それは違う。ある一定の〈こなれた〉日本語しか書けない翻訳者は、その翻訳空間が固化している。そのような翻訳者は、自分のなす目標言語の措定がいつも同じで、表現体もいつも同じである。目標言語も表現体もどちらもあまり区別していないといってもいい

かもしれない。しかし、柴田の場合、おそらく目標言語の措定はいくぶん広い。そのぶん、表現体の設定がかなり厳密にできるのではないだろうか。広い目標言語の領域の中で、自分の書きたい表現体をねらい撃ちする。この作品のためには、ここへ目標テクストを訳出しよう、という意識もありながら、この作品はここに撃ち込んではいけない、という考えもある。あえて措定の外に撃つこともできるだろう。措定した言語の中をかなり広く見渡すことができながら、それぞれの措定は強く、間はきわめて真っ白である。

その結果、生まれる翻訳は、言語措定に対して単に保守的な作品ではなく、いったん閉じてしまった、あるいは忘れられてしまった〈言語の場所〉、あるいは新しい〈コトバの居場所〉を見つけ出すような作品が現れてくることになる。

そういった柴田の高精度な翻訳の中からここに取り上げるのは、ポール・オースター［著］『最後の物たちの国で』である。柴田の訳文として典型的な部分を一段落分、起点テクストとともに引用すると、

> ひどく痩せていて、風に吹き飛ばされてしまう人もいます、と彼女は書いていた。街の風はすさまじく強く、ひっきりなしに川から吹きつけて耳の中で歌い、身体を前後に揺さぶり、紙くずやゴミを行く手にたえず吹き上げます。突風に飛ばされないように、がりがりに痩せた人たちが二、三人、時には一家全員ロープや鎖で体をつないで道を歩いていることも珍しくありません。外に出るのをまったくやめてしまう人たちもいます。戸口や、部屋の凹みにしがみついているうちに、この上ない晴天でさえも驚異に思えるようになってしまうのです。出ていって石をぶつけられるより、家の中で大人しくしていたほうがいい、と彼らは考えます。あるいはまた、食べないことにものすごく長けていって、ついには食べようにも何も食べられなくなってしまうという例もあります。（柴田元 1999**b:** 7-8）

> **There are people so thin, she worte, they are sometimes blown**

away. The winds in the city are ferocious, always gusting off the river and singing in your ears, always buffeting you back and forth, always swirling papers and garbage in your path. It's not uncommon to see the thinnest people moving about twos and threes, sometimes whole families, bound together by ropes and chains, to ballast one another against the blasts. Others give up trying to go out altogether, hugging to the doorways and alcoves, until even the fairest sky seems a threat. Better to wait quietly in the their corner, they think, than to be dashed against the stones. It is also possible to become so good at not eating that eventually you can eat nothing at all. (**Auster** 1989**:** 3)

これは起点テクストの別の訳を並べるととてもわかりやすいのだが、柴田の書く目標テクストはまず簡潔である。ふつう、翻訳すると起点テクストよりも目標テクストの方が長くなるとも言われるが、バイト数でいって50ほど少なくなっている。また、特徴的なのが〈は〉の少なさだ。起点テクストの中でも挿入的に使われ、目標テクストで指示のために使わざるを得ない〈は〉の２箇所と、接続詞の〈あるいは〉を抜けば、辞の〈は〉はふたつしかない（しかも、後ろのひとつは強調的な用法である）。では、今度は次の文章を読んでもらいたい。

彼女はこう書いていた。とても痩せている人たちがいて、その人たちはときどき吹き飛ばされてしまいます。この街の風はすさまじく、いつも川の水を巻き上げては耳の中で歌ったり、いつも強い風で人を前後にあおったり、いつも紙やごみを路上で舞わせています。これ以上に痩せようのない人たちが二、三人、あるいは一家族が、縄や鎖でお互いにしばって、突風でも大丈夫なようにして歩いているのを見ることは、よくあります。別の人たちは、外出を完全にやめてしまいます。戸口やアルコーブに抱きついていて、この上ない快晴でも怖くなってしまったのです。

自分の隠れ場にいることは、石を投げられるよりもいいと、彼らは思っています。また、そんな人たちはそのまま食べないことがとても上手になって、最終的にまったく何も食べなくてもよくなるということも、ありえるでしょう。（筆者訳）

この訳は意図的にこしらえたものだが、これと比べると、柴田の文章がきわめて和文的であるということが感じていただけると思う。起点テクストにおいて、このパラグラフは〈風〉による人々への影響が主題となっているが、柴田の目標テクストでは〈風〉を〈は〉で受け、風を主題としてフォーカスし、そのまま文章を続けている。

もし柴田の訳と私の訳が違うとすれば、それは〈は〉の使い方である。〈は〉は、学校文法においては、主語を受ける係助詞というふうな説明や、あるいは一度取り上げた内容を語るために使う、などというふうに説明されているかもしれない。しかしそれは明治以降、翻訳としての日本語文法が構築されてからの定義である。もともとの〈は〉には、物事や人に焦点を当てる、フォーカスするという機能しかなく、何かを指示したり、提示したりする助辞なのである。たとえば、三上章の著書の題名で有名になった例文、

象は鼻が長い。

この文章は、もと〈象の鼻が長い〉という文章の〈象〉に焦点を当てて取り出し、〈象に関しては〉鼻が長いものである、ということを述べている。またフォーカスしなければならないということは、その焦点を当てる対象が存在していなければならないので、文章においてまず出ているか、それか書き手と読み手にとって既知の事象であるか、どちらかでなければならない。一般的な事象について述べるのであれば、いきなり〈……は〉と切り出すことも可能であろう。そして切り出した内容について、そのフォーカスの範囲内で包み込まれるように語っていく。その明治以前の〈日本語〉の典型的なものとして、『枕草子』を考えることができる。

春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜(よる)。月のころはさらなり、闇(やみ)もなほ、蛍(ほたる)のおほく飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮(ゆふぐれ)。夕日のさして山の端(は)いと近うなりたるに、烏(からす)のねどころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとをかし。日入り果てて、風の音(おと)、虫の音(ね)など、はた言ふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭持(すみも)てわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶(ひをけ)の火も、白き灰(はひ)がちになりてわろし。(清少納言 1997: 25-26)

というふうに始まる清少納言の随筆は、いくつか特徴があるが、その中のひとつに、〈は〉を使ってその章段で取り上げる題目を掲げ、それについてつらつらと語るというものである。こういった章段では、〈は〉は題目へのフォーカスとして使われる。〈春については〉、〈夏については〉、〈虫については〉、〈雪については〉というように、語りたい内容を取り上げる。〈は〉という辞によって、ひとつの文章のまとまりが作られるのである。

かたや〈英語〉のパラグラフというのは、**Oxford Advanced Learner's Dictionary** を引いてみても、「**a section of a piece of writing, usually consisting of several sentences dealing with a single subject.**」と書かれているように、その段落内でひとつの題目を扱うという構造である。してみると、〈英語〉のパラグラフと〈近代以前の日本語〉の〈は〉はある種の近い構造があるということになる[5]。

だが、明治以降、主題をフォーカスするものとして使われていた〈は〉が、他の使い方にも転用されることになる。それが、翻訳文において起点テクスト

で主語であった名詞の訳語のあとにつける〈は〉である。柳父章は、その著書『比較日本語論』(1974) と『近代日本語の思想　翻訳文体成立事情』(2004) で、この〈は〉が翻訳文で使われていく過程を追っている。明治初期、〈は〉が広い範囲の文章を統括する題目としての用法から、西洋的な一センテンスにおける〈主語〉という小さな題目に転用され、繰り返されることによって、〈は〉は様々なものをフォーカスでき、また多用できるものとして変化していった。その結果生まれたのが、〈は〉を多用する〈翻訳的日本語文〉である。

その出自ゆえに、翻訳にはこれでもかというほど〈は〉が連発される。もう慣れてしまっているので、読む側もそれほど気にならない。ただ神経が過敏になっている人が、そのような翻訳を読みながら、「フォーカスしすぎだ！」と叫んでしまいそうな精神状況になっているとき、パラグラフの題目だけに〈は〉をつけて、さっと書き流す文章に出会うと、「なんて古風なんだろう」というノスタルジィを感じるということもありうるだろう。

アイヴァン・モリス **Ivan Morris** に『枕草子』の英訳があるが、その題目的章段を読んでみると、題目の〈は〉ひとつに対してひとつのパラグラフに対応させてあるところがある。

> **In spring it is the dawn that is most beautiful. As the light creeps over the hills, their outlines are dyed a faint red and wisps of purplish cloud trail over them.**
>
> **In summer the nights. Not only when the moon shines, but on dark nights too, as the fireflies flit to and fro, and even when it rains, how beautiful it is!**
>
> **In autumn the evenings, when the glittering sun sinks close to the edge of the hills and the crows fly back to their nests in threes and fours and twos ; more charming still is a file of wild geese, like specks in the distant sky. When the sun has set, one's heart is moved by the sound of the wind and the hum of the insects.**
>
> **In winter the early mornings. It is beautiful indeed when snow**

has fallen during the night, but splendid too when the ground is white with frost ; or even when there is no snow or frost, but it is simply very cold and the attendants hurry from room to room stirring up the fires and bringing chacoal, how well this fits the season's mood! But as noon approaches and the cold wears off, no one bothers to keep the braziers alight, and soon nothing remains but piles of white ashes. (**Morris** 1967: 1)

もちろん底本が段落で区切られている点も影響されていようが、それを抜きにしても、この英訳を見ることによって、逆にパラグラフひとつに〈は〉ひとつという、きわめて古風な和文への翻訳の技法というのも、パラグラフ内に何度も限定の語句が出てこなければ可能なのだと思えてくる。またそれをたまに（無意識か）実践してみる柴田元幸はとても貴重であると感じてしまう。

もうひとつ、柴田元幸の訳文で古風さを感じさせてくれるものとして、Ｔ・Ｒ・ピアソン［著］『甘美なる来世へ』を挙げよう。柴田本人もお気に入りの冒頭部分。

それは私たちが禿のジーターを失くした夏だったが禿のジーターはジーターといってももはや大半ジーターではなく大半スロックモートンにたぶんなっているというか少なくとも大半スロックモートンになっているとたぶん思われていてそう思われることが大半ジーターだと思われることより相当の向上ということになるのはジーターにはたいした人間がいたためしがないのに較べてスロックモートンたちはかつてはひとかどの人間だったからであるがただしそれも金がなくなり威信が消えてしまう前の話であって今となっては空威張りと汚名と漠たるスロックモートン的風格が残るばかりでありそんなものは全部合わせたところでおよそ騒ぎ立てるほどの遺産ではないのであるがそれでも空威張りにせよ汚名にせよ漠たる風格にせよどの一つを取ってもそれだけでジーターたちによって試みられ達成された発展総体を凌駕（りょうが）していると言ってよく何しろジ

ーターたちといえば昔から地面をひっかき回してはきたものの農業で物になったわけでもなく家畜の売買に手を染めても売買もやっぱり物にならず結局鶏小屋の建設に勢力を注ぐに至ったもののこの鶏小屋たるやはじめからグラグラもいいところでその後ますますグラグラになっていったのであるがそれでもこれは雌鶏(めんどり)や斑入(ふい)りの小さな茶色い卵やアンモニアの雲と並んでジーターの発展の主たる成果でありさらにアンモニアの雲についていえばそれ自体はおそらくジーター最大の達成であろうがただし特定個人のジーターなりジーターたちの特定グループなりが積極的にその達成に貢献したわけではなく逆にその達成を阻止できたわけでもなかったのであるがいずれにせよそんなわけで禿のジーターが、デブのジーターを花嫁付添いとして、一九四二年六月十二日土曜日にメソジスト教会の聖域においてブラクストン・ポーター・スロックモートン三世と誓いの言葉を交わしたのちニーリーの町なかに新居を構えたとき、禿のジーターはこれで雌鶏とも鶏小屋とも頭上を覆うアンモニアの雲ともおさらばしたわけであるがアンモニアの雲についてはおそらく一九四二年六月にもすでに広がりはじめていたと考えられるものでありその根拠はアンモニアの雲はほぼ毎年六月になると広がり出しそのまま八月までどんどん膨らんでいって九月にまで至るのが常であったからで、特にこれから語ろうとしている年の前年のとりわけ八月ととりわけ九月にはアンモニアの雲が町の境界までじわじわにじり寄ってきて貯氷庫にとっては驚異の様相を呈したのであるがまあこれはこの季節には恒例かつ月並な出来事と言ってよく、なかんずく八月そしてなかんずく九月にはそうであるゆえ、かくしてその年も私たちはダーウッド・ブリッジャー氏がスロックモートン宅の外壁板に梯子を立てかけて二階にのぼり寝室の網戸に鼻を押しつけて額に手をかざし禿のジーターに呼びかけわめきどなって禿のジーターが永久に我々のもとから去ったことを確認するまでは今やごくふつうとなった夏を過ごしていたのである。(柴田元 2003**b:** 5-6)

「という書き出しではじまりこの後いくらかは息が短くはなるもののまあこれと似たような調子で」（柴田元 1999**a:** 188）四百ページくらい続くわけであるが、柴田はこの翻訳のあとがきで、この起点テクストに対して「ふつうの文章ではない」（柴田元 2003**a :**395）といい、不自然な訳文を書くことをつとめたらしいが、確かに、この目標テクストは今の感覚から見たら〈不自然〉かもしれない。だらだらと筆が進み、句読点もほとんどない。しかし、センテンス・句読点という概念は、昔から〈日本語〉なるものにあったわけではなく、やはり明治初期に移植されたものである。これも先に紹介した柳父章の二著に詳しく書いてあるが、それより以前には、句読点といったものはなく、文はだらだらとすべてつながっていてはっきりとした切れ目という切れ目がなかった。もしそのころの感覚でこの訳文を読んだなら、不自然でもなんでもなく、ふつうに読むこともできるかもしれない。個人的な感覚と、ひとつ前に『枕草子』を引いた関係から、このだらだらと面白いのか面白くないのかわからない（が結局は読むこと自体が面白くなってくる）ような文章が続く作品として、『源氏物語』を連想する。

今でこそ『源氏物語』は、その翻刻したものを見ても、句読点が打ってあり、文章がセンテンス概念で再構成されているものの、もちろん最初からそうであったわけではない。青表紙本の複製から試みに冒頭を活字翻刻してみると、

> いすれの御ときにか女御更衣あまたさふらひ給けりなかにいとやむことなきゝわにはあらぬかすくれてときめきたまふありけりはしめよりわれはとおもひあかり給へる御かた／＼めさましき物におとしめそねみたまふおなし程それより下らうの更衣たちはましてやすからすあさゆふのみやつかへにつけても人のこゝろをのみうこかしうらみをおふつもりやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなるものにおほゝして人のそしりをもえはゝからせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなしなりかむたちめうえ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の音おほえなりもろこしにもかゝる事のおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあち

きなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひたまふちちの大納言はなくなりてははきうたのかたなむいにしへの人のよしあるにておやうちくしさしあたりて世のおほえはなやかなる御かた／＼にもおとらすなに事のきしきをももてなし給けれととりたてゝはか／＼しきうしろみなけれはことあるときはなほより所なく心ほそけなりさきの世にも御ちきりやふかゝりけむよになくきよらなるたまのおのこみこさへうまれ給ぬいつしかと心もとなからせ給ていそきまいらせて御らんするにめすらかなるちこの御かたちなり一のみこは右大臣の女御んお御はらにてよせおもくうたかひなきまうけの君とよにもてかしつきゝこゆれとこの御にほひにはならひたまふへくもあらさりけれはおほかたのやむことなき御おもひにてこの君をはわたくし物におほしかしつきたまふことかきりなしはゝ君はしめよりをしなへてのうへみやつかえし給へききはにはあらさりきおほえいとやむことなく上すめかしけれとわりなくまつは（紫式部 1981: 1-5）

となるのだが、だからといって、慣れていればものすごく読みにくいということはない。同じように、柴田の訳文も一見不自然に見えるが、その読み方の生理的流れに慣れてしまえば、文意がまっすぐ流れているので、そのままだらだらと読み続けることができる。

〈は〉の題目的文章も、句読点のないすべて連なった文章も、明治以後、あまり見られなくなっていった。つまるところ、もとそこにはそういった表現体があったが、翻訳文による衝撃で、その表現体が不自然なものとして閉じてしまったのであろう。もちろん今でも『枕草子』や『源氏物語』を読めば、その感覚を得ることは可能だが、いかんせんその書かれている言語は、現代に生きている者にとっては〈外国語〉のようなものである。しかし、柴田元幸の翻訳を、いまや消えた古い表現体を、今の世によみがえらせ、その感覚を与えてくれるテクストとしてみると、別の価値が生まれてはこないだろうか。そのテクストを生成したのが、起点テクストに影響を与えられた柴田元幸という翻訳者

であり、その翻訳空間が強く、その措定が柔軟であるために、このような様々なテクストを生み出し得る。単に〈日本語〉の翻訳で、特に変わったところのない翻訳だとしても、その空間や措定を柔軟に行えるかどうか、あるいは起点テクストに応じて柔軟に対応できるかどうかで、翻訳者の評価は大きく変わってくるだろう。

また、このように翻訳者の身体性が高く要求されるような翻訳の場合、その翻訳空間が強くなり、翻訳者に要求されるエネルギーも大きくなる。特に措定や表現体の設定が厳密で、また態度として「みずからを消そうと」（柴田元 1997a: 210）する、自分を捨象して推理上の作者へ近づこうとする〈没入型〉の翻訳者であるので、柴田はいきおい〈根本的解釈〉に近づかざるを得ない。互いに異化されてしまった、それぞれがまったく別の個として意識されているとき、つまり〈他人〉の〈他者性〉を意識しているとき、他者を理解しようとするには、自分の全身をもって理解しようとしなければ、他者へ近づく道はない。

もちろん翻訳には技術や経験も必要だが、しばしば翻訳が肉体労働と言われるように、このような身体性の高い翻訳を長く続けるには膨大なエネルギーが必要とされる。柴田が翻訳を為し得ている以上、どこからかそのエネルギーが捻出されているはずで、ぼんやりとしている間にできるものではなく、やる気や体力のないものがただこなせるような類の行為ではない。

おそらく、柴田の翻訳へ向かうエネルギーの源泉は、彼が最近語り始めた起点テクストへの〈愛〉であろう。それまで柴田の翻訳を語る際のキーワードとしてとらえられていたのは〈透明〉や〈幽霊〉といった言葉だが、21世紀に入ってから書かれた「愛の翻訳論へ向けて」で、次のような一節がある。

> ミもフタもない言い方をしてしまおう。原テクストに対する敬意、愛情を問題にしない翻訳論は、僕にはすべて空しく感じられる。原文を「聖なる原典」と捉えることをやめてみるのはひとつの見識だろう。だが、原文を「聖なる」ものと感じないのであれば、少なくとも文学の翻訳に関する限り、翻訳なんかやったって仕方ないのである。（柴田元 2001: 130）

その〈愛〉というのは、対象に迫ろうとする情念か、それとも対象と同化したいという気持ちか、あるいは対象を所有したいという欲望か、はたまた対象を貫きたいとする想いかもしれないし、貫かれたいとする想いかもしれない。それがどのようなものであるかは、翻訳者によって違うだろうし、それが翻訳を行うときの態度の違いにもなるだろう。

翻訳空間は、それを強く意識することによって、ふたつの閉じた枠を抽出する。どちらも自分に関係のない枠のこともあれば、どちらかひとつが自分である場合もある。とにかく何でもいい。誰かが、ふたつの閉じた枠を発見する。そのふたつは最初から存在しているわけではない。〈誰か〉が〈見る〉、そう〈解釈〉するのである。何気なく生きていて、ふと気がつく。あるいは、自分の生きる世界から、その閉じた枠が襲いかかってくる。ふたつのものが〈閉じていて〉、〈通じ合っていない〉。

閉じているものを開きたい、ふさがっているものを通したい、そういう感覚から翻訳は始まる。それは単に言語に限らない。個人の想いでもよければ、何かの思想、技術、叫び、悦び、楽しさ、とかく人間が感じ行動することのすべてであり、対象は人間そのものでもある。ふたつの閉じたものを通じさせたいという衝動が〈愛〉と呼べるのであれば、翻訳の動機が〈愛〉でなくて何であろう。それは必ずしも高尚なものではないし、あるときには愚かで、あるときには素晴らしいものである。だがいずれにせよ、人間にとってこの〈つなぐ〉行為が基本であることには変わりがない。

人と同化しようとするもの、人を代弁しようとするもの、起点文化を吸収しようとするもの、起点文化を押しつけようとするもの、テクストを飲み込もうとするもの、テクストとたわむれようとするもの、テクストを頼ろうとするもの、テクストを語ろうとするもの、テクストを嗚咽とともに吐き出そうとするもの、テクストを奏でようとするもの、人を伝えようとするもの、人をつなげようとするもの、その様々な態度は、すべて翻訳者の〈愛〉の現れである。

これより先、翻訳者の現象学は、言語措定を含め翻訳空間がどのように設定され、そこから翻訳者がどのような〈愛〉を、どのように見出し、どのように

表現するのか、というところを研究していくことになるだろう。その分野において、翻訳は例外的な事象でもなければ英雄的な行為でもない。それはごくふつうの人間の一般的行為である。もしそれが英雄的に、例外的に見えるとすれば、取り上げた題材がたまたまそうであったに過ぎない。

注釈

[4] 柴田元幸とポスト春樹世代との関連は、三浦雅士『村上春樹と柴田元幸のもうひとつのアメリカ』を参照のこと。

[5] 柳父章は、〈は〉に導かれる主題文が導くことのできる文章の長さは、「あるときには **sentence** に等しく、あるときは **paragraph** に等しい」としながらも、本質的には「両者の中間」であるとしている（柳父 1974: 18）。

参考文献

青山南（1987）『ピーターとペーターの狭間で』本の雑誌社

――（1998）『翻訳家という楽天家たち』筑摩書房

――（1999）『木を見て森をみない』筑摩書房

浅倉久志（1973）「翻訳家めぐり３　浅倉久志氏」『季刊翻訳　1973 **No.** 3』みき書房

池上嘉彦（1995）『〈英文法〉を考える』筑摩書房

大津栄一郎（1993**a**）『英語の感覚（上）』岩波書店

――（1993**b**）『英語の感覚（下）』岩波書店

小林淳夫（1996）『翻訳の極意――「創造する翻訳」の実際――』南雲堂フェニックス

斎藤兆史、野崎歓（2004）『英語のたくらみ、フランス語のたわむれ』東京大学出版会

佐藤良明（1986**a**）「翻訳魔術論１」『翻訳の世界　一九八六年四月号（第11巻第4号）』日本翻訳家養成センター

――（1986**b**）「翻訳魔術論４」『翻訳の世界　一九八六年七月号（第11巻第7号）』日本翻訳家養成センター

――（1986**c**）「翻訳魔術論７」『翻訳の世界　一九八六年十月号（第11巻第10号）』日本翻訳家養成センター

――（1986**d**）「翻訳魔術論８」『翻訳の世界　1986年11月号（第11巻第11号）』日本翻訳家養成センター

――（1987**a**）「翻訳魔術論10」『翻訳の世界　1987年1月号（第12巻第1号）』日本翻訳家養成センター

――（1987**b**）「翻訳魔術論11」『翻訳の世界　1987年2月号（第12巻第2号）』日本翻訳家養成センター

――（1997）「論文の翻訳　それは論文でないものの翻訳と同じです」『翻訳の方法』（川本皓嗣、井上健［編］）東京大学出版会

――、柴田元幸（1999）『佐藤君と柴田君』新潮社

柴田元幸（1994）「言語の論理　翻訳――作品の声を聞く」『知の技法　東京大学教養部「基礎演習」テキスト』（小林康夫、船曳建夫［編］）東京大学出版会

――（1996）『生半可な學者』白水社

――（1997**a**）『舶来文学柴田商店　国産品もあります』新書館

――（1997**b**）「執筆者紹介」『翻訳の方法』（川本皓嗣、井上健［編］）東京大学出版会

――、佐藤良明（1999**a**）『佐藤君と柴田君』新潮社

――［訳］、ポール・オースター（1999**b**）『最後の物たちの国で』白水社

――（2000**a**）『愛の見切り発車』新潮社

――、村上春樹（2000**b**）『翻訳夜話』文藝春秋

――（2001）「愛の翻訳論へ向けて」『シリーズ言語態２　創発的言語態』（藤井貞和、エリス俊子［編］）東京大学出版会

――、村上春樹（2003**a**）『翻訳夜話２　サリンジャー戦記』文藝春秋

――［訳］、Ｔ・Ｒ・ピアソン（2003**b**）『甘美なる来世へ』みすず書房
――（2004）「翻訳者は「作者代理」か「読者代表」か」『読むことの力　東大駒場連続講義』（ロバート キャンベル［編］）講談社
鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波書店
――（1990）『日本語と外国語』岩波書店
――（1991）『ことばの社会学』新潮社
清少納言（1997）『枕草子　新編日本古典文学全集18』（松尾聰、永井和子［校注］）小学館
高山宏（1996）「変換文化と翻訳」『英語青年　11月号　第142巻第8号』研究社
――（2005）「翻厄こんにゃく、或は命がけ」『ユリイカ１月号　第37巻第1号』青土社
新元良一（2004）『翻訳文学ブックカフェ』本の雑誌社
野崎歓（2004**a**）「翻訳理論と翻訳のはざまで――フランス文学の場合」『國文學――解釈と教材の研究――平成16年9月号』學燈社
――、斎藤兆史（2004**b**）『英語のたくらみ、フランス語のたわむれ』東京大学出版会
――（2005）「翻訳は日々あたらしい　堀口大學入門」『ユリイカ１月号　第37巻第1号』青土社
野村喜和夫（1996）「ベンヤミンのひそみにならって」『現代詩手帖７月号（第39巻・第7号）』思潮社
三浦つとむ（1976）『日本語はどういう言語か』講談社
三浦雅士（2003）『村上春樹と柴田元幸のもうひとつのアメリカ』新書館
村上春樹（1999）『村上朝日堂はいかにして鍛えられたか』新潮社
――、柴田元幸（2000）『翻訳夜話』文藝春秋
――、柴田元幸（2003）『翻訳夜話２　サリンジャー戦記』文藝春秋
紫式部（1981）『宮内庁書陵部蔵　青表紙本　源氏物語　桐壺』（山岸徳平［編］）新典社
柳父章（1972）『翻訳語の論理――言語にみる日本文化の構造』法政大学出版局
――（1974）『比較日本語論』日本翻訳家養成センター
――（1976）『翻訳とはなにか――日本語と翻訳文化』法政大学出版局
――（1977）『翻訳の思想――「自然」と **NATURE**――』平凡社
――（1978）『翻訳文化を考える』法政大学出版局
――（1982）『翻訳語成立事情』岩波書店
――（1983）『翻訳学問批判　日本語の構造、翻訳の責任』日本翻訳家養成センター
――（1998）『翻訳語を讀む――異文化コミュニケーションの明暗――』丸山学芸図書
――（2001**a**）『「ゴッド」は神か上帝か』岩波書店
――（2001**b**）『一語の辞典　愛』三省堂
――（2002）『秘の思想　日本文化のオモテとウラ』法政大学出版局
――（2004**a**）『近代日本語の思想　翻訳文体成立事情』法政大学出版局
――（2004**b**）「兆民はなぜ『民約訳解』を漢文で訳したか」『國文學――解釈と教材の研究――平成16年9月号』學燈社
和田忠彦（2004**a**）『声、意味ではなく　わたしの翻訳論』平凡社

――、柴田元幸（2004**b**）「〔対談〕翻訳と文学」『國文學――解釈と教材の研究――平成16年9月号』學燈社

Auster, Paul (1989) *In the country of last things*, London: Faber and Faber.

Davidson, Donald (1984) *Inquiries into truth and interpretation*, New York: Oxford University Press.（野本和幸［ほか訳］『真理と解釈』勁草書房、1991）

------ (1986) 'A coherence theory of truth and knowledge', in Ernest Lepore [ed.] *Truth and interpretation, perspectives on the philosophy of Donald Davidson*, Oxford; New York: Dasil Blackwell.（丹治信春［訳］「真理と知識の斉合説」『現代思想　六月号　第十七巻第七号』青土社、1989）

Derrida, Jacques (1972) 'La différance', in *Marges de la philosophie*, Paris: Éditions de Minuit.（高橋允昭［訳］「ラ・ディファランス」『理想 11 月号　1984 No.618』理想社、1984）

------ (1985) 'Des tours de Babel', in J. F. Graham [ed.] *Difference in translation*, Ithaca, NY: Cornell University　Press.（高橋允昭［訳］「バベルの塔」『他者の言語――デリダの日本講演』法政大学出版局、1989）

------ (1996) *Le monolinguisme de l'autre, ou, La prothèse d'origine*, Paris: Galilée.（守中高明［訳］『たった一つの、私のものではない言葉――他者の単一言語使用』岩波書店、2001）

Merleau-Ponty, Maurice (1945) *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard.（中島盛夫［訳］『知覚の現象学』法政大学出版局、1982）

------ (1952) 'Sur la phénoménologie du langage', in *Problèmes actuels de la phénoménologie*, Paris: Desclée de Brouwer.（高橋允昭［訳］「言語の現象学について」『現象学の課題』せりか書房、1983）

------ (1975) *Les Sciences de l'homme et la phénoménologie*, Paris: Centre de documentation universitaire.（木田元［訳］「人間の科学と現象学」『人間の科学と現象学　メルロポンティ・コレクション１』みすず書房、2001）

Morris, Ivan [tr. and ed.] (1967) *The pillow book of Sei Shōnagon*, London: Oxford University.